の変遷過程の実態を示す考古学的成果として重要です。

一方、シャコデ廃寺では、9世紀初頭に2×7間の方形柱穴による掘立柱建物をはじめとする建物群が成立し、寺院においても公的色彩の濃厚な関連施設の整備が行われたとみられます。奈良・平安時代の寺家遺跡は、国家的な神祇と仏教の祭祀とともに、土馬や牛馬歯骨を伴う祈雨などの祭祀も併存していたと考えられ、多様な祭祀と信仰が併存し重層する、ひとつの大きな宗教的空間が成立していたと考えられます。

平安時代後期～中世（鎌倉・室町時代）

先述した9世紀代の遺構群の多くは、9世紀末から10世紀初頭にかけての海岸からの砂丘移動による砂丘土（間層）に被覆されています。この砂丘土の分布は広範囲に及んでおり、祭祀場のほか遺跡南部の大半が埋没したと考えられます（図2-20）。これにより、祭祀場、生産域のほか、一部の建物群が機能しなくなったと考えられ、古代の神祇祭祀の執行に影響を及ぼしたと推定されます。このことは、10世紀後半以降に、古代にみられた銅鏡などの金属製祭祀遺物がみられなくなることからもうかがえます。

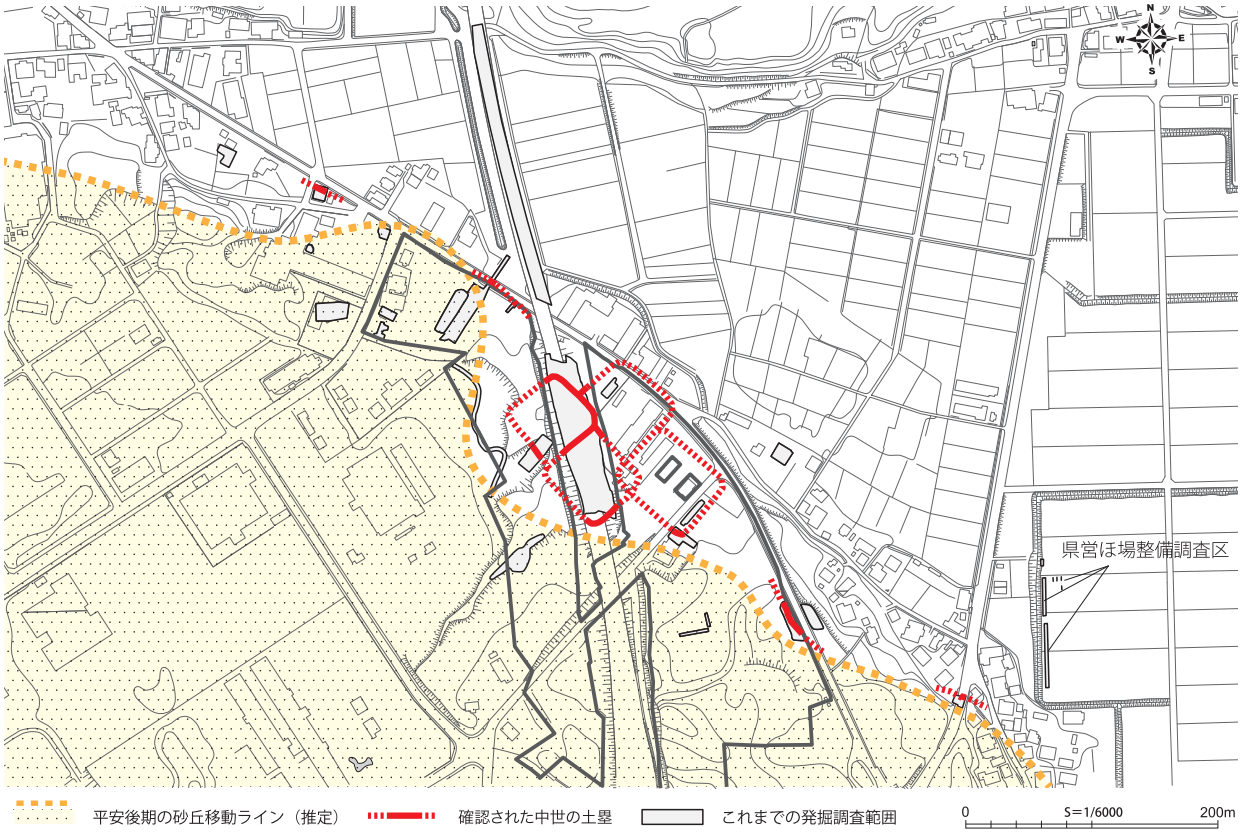
この背景には、律令制による国家統治機能の低下が始まる社会的変化の影響が想定されるほか、渤海国の滅亡など、政治・外交上の変化も起こっており、古代の能登国が担った役割や位置づけにも影響を及ぼしたと考えられます。加えて、上記の自然環境の変化による砂丘移動も起こっており、奈良時代以来、古代神社として整備されてきた宗教的空間に大きな変化があったと考えられます。

遺跡東部の沖積湿地に位置する第11次調査区（県営ほ場整備調査区）では、11世紀代の木製形代の人形や檜扇などの祭祀遺物が出土しています。出土地区から推定して、邑知潟に近接して形代類等を使用する、水辺の祭祀が行われていた可能性があります。

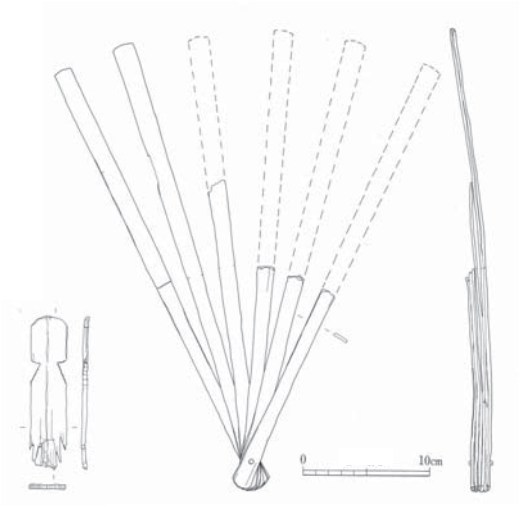
寺家遺跡の木製祭祀具の出土は極めて少数です。これは、砂丘遺跡であるため、木製品が湿潤な環境化で保存されず残存状態が悪いことに起因するものと考えられます。先述した9世紀の宮厨建物群に伴う井戸遺構では、斎串が出土しているほか、遺跡南部では、木地師など木工生産域の存在も想定されることから、古代においても木製祭祀具を使用した水辺の祭祀等が行われていたことも想定しておく必要があります。

この時期を画期として、砂丘の埋没を逃れた範囲では、溝と土塁を四角く築いてその内部に掘立柱建物を建てる中世的な景観へ徐々に変化していきます。13世紀～14世紀後半には、溝と土塁による区画遺構が発達し、一辺約50m のほぼ正方形の区画をひとつの単位とする「方形郭」が成立して、この郭が4つ接続する郭群が形成されたとみられます（図2-20）。この郭の内部の建物の性格については、第1郭に石塚遺構が存在するなど、一般的な集落とは考え難く、古代以来の神社関連施設を継承した中世の神社や社家の関連施設の可能性があります。また、この土塁は、史跡指定地の周辺でも確認されており、その全容の解明が課題となっています。

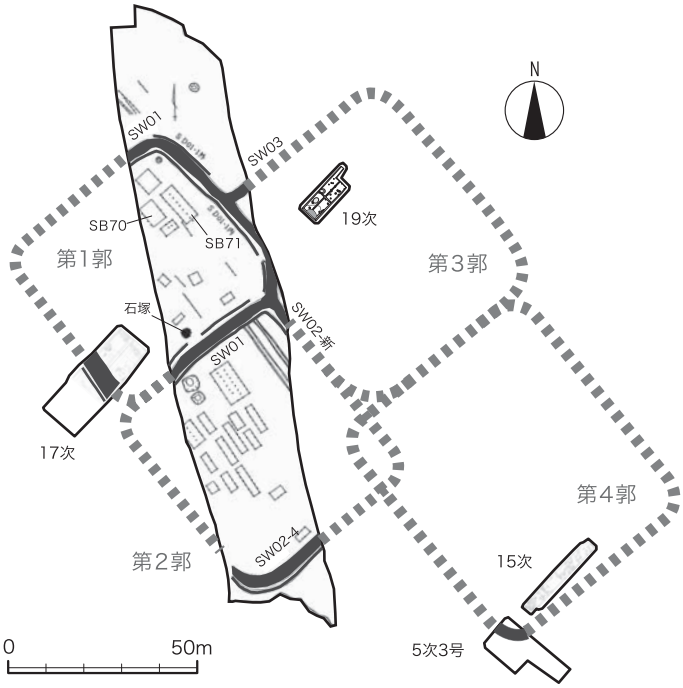
郭群の内部の建物群は、14世紀後半には廃絶し、その後は、無数の畝溝遺構が検出されることから、畠地として利用されるようになります。そして、再度、大規模な海岸線からの砂丘移動を受けて、寺家遺跡全体が砂に覆われて埋没し、15世紀には遺跡が完全に廃絶します。



平安後期の砂丘移動ラインと中世の土塁遺構　羽咋市教委 2010 から転載・加筆・修正



木製人形・檜扇（県営ほ場整備調査区出土 11 世紀 S=1/6）
石川県埋蔵文化財センター 1997 から転載



方形郭遺構の推定図（13~14 世紀後半）　羽咋市教委 2010 から転載

土塁・溝・内部の建物群による方形郭群の検出状況
（第 3 次調査 1980）※石川県埋蔵文化財センター提供

第 1 郭の石塚遺構（第 3 次調査 1980）
※石川県埋蔵文化財センター提供

図2-20　中世の主な遺構と遺物

（5）考古学的成果と文献史料との整合性

以上に述べた寺家遺跡の考古学的成果は、古代の気多神社関連の文献史料と深い関わりを持っています（表2-8）。『万葉集』には、748年に越中国司の大伴家持が、当時越中国に併合されていた能登国内を巡行し、「気太神宮」（気多神社）を訪れたことが記されています。これは、古代の気多神社の存在を確認できる最も古い記述です。この家持の能登国巡行は、国司着任後の国つ神への参拝と、出挙のため部内の要地を視察するものです。このことは、家持が参拝する以前から、気多神社が能登国の国つ神として重要視されていたことを示しています。この8世紀中葉は、寺家遺跡では国家の関与のもと、祭祀専業的集落が展開していた頃にあたります。

このほか、8世紀後半から9世紀の後半にかけては、律令国家が編さんした6つの国史である六国史を中心に、国家による気多神社へのさまざまな厚遇措置を確認することができます。古代気多神社への奉幣使、神封・封戸の奉充、神階の昇叙、宮司の選任は神祇官の検校を得ること、禰宜・祝（神職）への把笏の許可、神宮寺への僧の配置と得度の許可などがみられ、神職の官人化、組織基盤の強化など、古代気多神社の官社化の過程を読み取ることができます。

同様の厚遇措置は、越前の気比神宮、常陸の鹿島神宮、下総の香取神宮にも確認できます。古代気多神社は、これらの神社と同様に、都から見た外部世界との境界領域に位置する要地の鎮護として、畿外では最高の社格を持つ地方有力神社のひとつに名を連ねていました。

こうした厚遇措置の背景には、古代の能登国が置かれた地理的・歴史的環境に起因する地勢的な拠点であったことが考えられます。能登国は、8世紀前半に交流を開始する渤海国や9世紀代に緊張関係にあった新羅との外交的関係のほか、東北・北方世界を結ぶ要地であったことからも想定されるように、能登は異世界との境界に位置していたと考えられ、北陸道においては気比神宮と気多神社が重視されていました。越前国の敦賀では、来着する渤海使節の安置・供給のための施設として「松原客館」が設置され、気比神宮がその監督の任に当たりました。能登国においても同様の施設である「能登客院」の造立が命じられています。

奈良・平安時代では、国内に来着する使節（蕃客）には、異国の神（疫神）が付着して入ってくると考えられていました。使節のうちには入京する者もあることから、その管理は国家にとって重要課題とされていました。このため、能登国の気多神に、その疫神の祓いや、使節の航海の安全を祈願する祭祀を担わせたと考えられます。この時期の寺家遺跡では、先述したとおり、古代神社に関連する施設群と工房等の生産域が分離・再編・整備される、官社化の様子と祭祀場での継続的な祭祀活動をみることができます。

以上に述べたように、寺家遺跡の考古学的成果は、文献史料にみられる古代気多神社に対する記述の年代と同時性を持ち、その内容についても両者を対比して理解することが可能です。このことは、寺家遺跡が古代気多神社の諸活動を反映した内容を有する遺跡であると指摘することができ、両者は深い関連性を持つと言うことができます。また、両者の関係が、能登半島がおかれた地理的・歴史的環境における国内の政策課題等と連動させて理解できることも重要です。

以上のように、考古学と文献史料の両面から、史跡の価値について検討し、理解することができることも、この遺跡の非常に重要な点と言えます。

表2-8　寺家遺跡関連史料年表

		寺家遺跡	シャコデ遺跡 シャコデ廃寺	その他の 関連遺跡群	能登・気多関連史料	
5世紀	400			滝大塚古墳		
6世紀	500	南端部に祭祀遺物を伴う竪穴建物3棟		滝古墳群・ 柳田古墳群		
7世紀	600	北部に竪穴建物集落形成	竪穴建物群集落	寺家モスケ古墳		
			掘立柱建物群集落	吾郎兵衛山窯 タンワリ1号窯	660	能登臣馬身龍が北方遠征に従軍し戦死
			シャコデ廃寺創建		698	渤海建国
8世紀	700	竪穴建物群の増加 （祭祀専業的集落形成） 国家的関与 （在地神から国家神へ）	伽藍の整備（塔跡・基壇状遺構検出）	製塩・製鉄遺跡群	718	能登1次立国
					727	渤海との国交開始
					741	能登国が越中国に併合
					748	大伴家持が巡行。気多神を参拝（万葉集）
	750	掘立柱建物へ建て替え 大型焼土遺構による祭祀 （祭祀場の形成と定着）			757	能登2次立国
					760	高元度を能登国司に任命
					765	気多神に幣帛（続日本紀）
					768	気多神に神封20戸・田2町奉充（続日本紀）
					770	称徳天皇平癒のため気多神に奉幣使（続日本紀）
					784	気多神の神階が正三位に昇叙（続日本紀）
9世紀	800	建物群「宮厨」成立 生産域：製塩/鍛冶・製鉄/木工 「官社化」による整備と生産体制の分業化が進む	伽藍東部に掘立柱建物群が建てられる	製塩・製鉄遺跡群	804	宮司の選任は神祇官の検校とする（日本後記）
					804	増加する渤海使の安置のため能登客院の造立を命じる
					806	気多神の神封30戸（新抄格勅符抄）
					834	気多社の禰宜と祝に把笏を許す（続日本後記）
					850	気多神の神階が従二位に昇叙（文徳天皇実録）
	850	建物群「宮司舘」成立 生産域：畠地 土器供膳具と祭具による奉献祭祀	シャコデ廃寺廃絶		853	気多神に封戸10烟と位田2町を加える（文徳天皇実録）
					855	気多神宮寺に常住僧3人を置き得度を許す（文徳天皇実録）
					859	気多神の神階が従一位に昇叙（日本三代実録）
					859	気比・気多両社に奉幣使（日本三代実録）
		砂丘移動により遺跡の大半が砂に埋没			868	気多社で金剛般若経が読経される（日本紀略）
10世紀	900		塔跡に総柱建物		926	渤海滅亡
11世紀	1000	溝による区画遺構が形成され始める		気多社僧坊群跡での活動がみられる		
12世紀	1100		中世遺物がみられる		1072	能登守藤原通宗が気多社社頭で歌合せを開催
13世紀	1200	土塁・溝・内部の建物による方形郭群が成立			1293	蒙古撃退祈願のため幕府が諸国一宮に御剣と神馬を奉納
14世紀	1350	郭内部の建物群が廃絶し、畠地化				
15世紀	1400	砂丘移動により遺跡の全域が埋没し廃絶		気多社僧坊群が整備される		

第７節　史跡の周辺関連遺跡群と文化財群

史跡と関連遺跡群が位置する柳田町・寺家町・一ノ宮町・滝町周辺は、市内でも特に遺跡が集中する地区として知られます。その種類も多彩であり、滝古墳群・柳田古墳群や、製塩・須恵器窯跡などの生産遺跡、古代寺院の柳田シャコデ廃寺跡、中世の気多社僧坊群跡遺跡などが分布しています。また、式内名神大社に列した気多神社、その背後の「いらずの森」と呼ばれる社叢、中世以来の社僧坊である正覚院、式内大穴持像石神社と霊石「地震石」など、現在も信仰を集める遺跡や文化財が多数残されています。以下には、これらの関連遺跡・文化財群についての概要を項目別に記載します。（詳細位置図は、第５章の図5-3を参照）

滝古墳群（5世紀前半～６世紀末）

眉丈山丘陵の突端部に営まれる古墳群で、滝崎先端部に展開するオーショージ（大清水）支群を含め、約20基の古墳が確認されています。なかでも最大の滝大塚古墳は、周溝・円筒埴輪・葺石を伴い、埴輪の年代観から５世紀前半の築造とされています。周溝は、現在でも一段低くなった水田として部分的に確認でき、その地割りの形状から、帆立貝型古墳と推定されています。造り出し部については不明ですが、円墳部の直径は約90mをはかり、規模・年代ともに、周囲の古墳群の盟主墳と位置付けられ、この時期の在地首長級氏族の存在をうかがい知ることができます。日本海沿岸部に築造された大型の帆立貝型古墳としては屈指の大きさを持ち、能登地区でも最大規模の古墳です。

滝３号墳は、滝大塚古墳から西へ約200mに位置する、周溝を持つ直径約15ｍの円墳です。ほ場整備のさいに発掘調査が行われており、国道により墳丘が損壊されている状態で発見されました。内部は朱塗りの小礫が敷き詰められた片袖式の横穴式石室で、６世紀初頭の築造とされています。出土品には、直刀・鉄鏃・鈴杏葉・轡・広口壷・器台などがあり、貴重な成果となっています。これに近接して1･2･6号墳が現地保存されており、葺石･埴輪片の出土の報告があります。滝崎先端部では、６世紀後半から末にかけてのオーショージ支群もみられ、長期にわたって造墓が行われています。

柳田古墳群（6世紀代）

柳田町集落背後の丘陵地に営まれる古墳群で、柳田うわの古墳群・山伏山古墳・柳田宮の山古墳をはじめとする13基の古墳が確認されています。なかでも６世紀前半に築造された前方後円墳の山伏山古墳は、全長49mをはかり、後円部に片袖式の横穴式石室が確認されています。石室は、盗掘を受け天井石も除去されている状態でしたが、出土遺物には、管玉・臼玉・刀子・鉄鏃・鉄杏葉・馬具金具・須恵器があります。能登地区の古墳では、滝３号墳とともに、いち早く横穴式石室が導入されており、日本海交流による技術や文化の影響を知ることができる古墳です。この古墳群からは、滝古墳群とは異なり葺石・埴輪が確認されておらず特徴的です。

柳田古窯跡群（5世紀後半～８世紀前半）

柳田古墳群に隣接して展開する、古墳時代から古代にかけての須恵器を生産した窯跡です。5世紀末には、ウワノ１号窯で須恵器生産が開始されています。タンワリ窯が生産のピークにあたる７世紀後半とされ、８世紀前半とされるアサバタケ窯まで、継続的に須恵器生産が行われていました。五郎兵衛山窯からは7世紀中葉の陶馬や円面硯が出土しており、器や壷・甕以外の特注

滝大塚古墳遠景　※破線は周溝の推定範囲

柳田山伏山古墳の石室

品も生産したと考えられます。ウワノ1号窯からは、鉄滓の出土報告もあり、周囲で製鉄遺跡の存在も推定されます。能登地区でもいち早く須恵器生産を開始した窯跡群であり、前記した滝大塚・滝3号墳・山伏山古墳と同様に、当地域への日本海交流による先進的な文化や技術の受容をうかがい知ることができる遺跡です。

寺家モスケ古墳（7世紀前半）

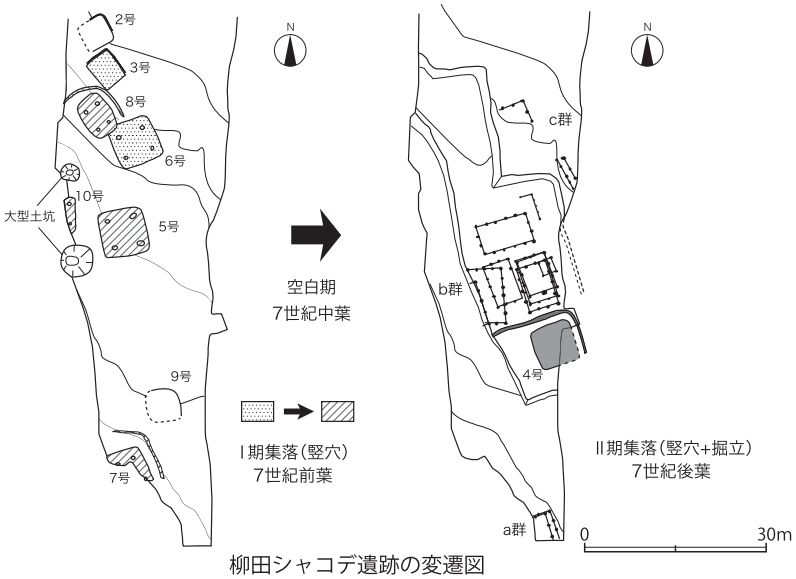
古墳時代でも終末期に作られた古墳です。柳田シャコデ遺跡の西に近接する段丘地形の端部で、残存する石室奥壁が露出する状態で発見されました。遺存状態が悪く、墳丘や石室を復元することはできませんでしたが、鍍金銅環・ガラス玉・須恵器高坏と蓋が出土しています。出土した須恵器から、7世紀前半ごろの築造と考えられ、寺家遺跡周辺では、この時期まで古墳づくりが継続して行われていたことを示す古墳です。

柳田シャコデ遺跡（7世紀代）

寺家遺跡に対面するシャコデ台地の先端部に位置する7世紀代の集落遺跡です。建物群は二時期が確認されています（図2-21）。前者は、6世紀後葉から7世紀前葉にかけての竪穴建物集落で、大型の竪穴建物群が検出されています。近接する土坑からは、焼成不良や窯壁溶着などの須恵器の失敗品が出土しており、背後の柳田古窯跡群での須恵器生産に直接的に関わる工人集落であったと考えられます。中葉に空白期を置き、7世紀後葉には、後者の掘立柱建物群による集落が成立し、8世紀前葉まで継続します。この時期の掘立柱建物の検出事例としては、周囲では他に例がなく、寺家遺跡よりも早く掘立柱建物へ移行しています。その規模から、須恵器生産を背景とした、周囲において優位性を持つ有力者層の居住が推定されます。柳田古窯跡群の須恵器生産のピーク期とも時期的に並行しており、両遺跡は密接な関係にあったと考えられます。

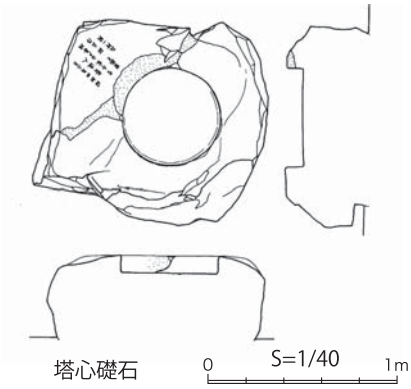
柳田シャコデ廃寺跡（7世紀末～9世紀前半）

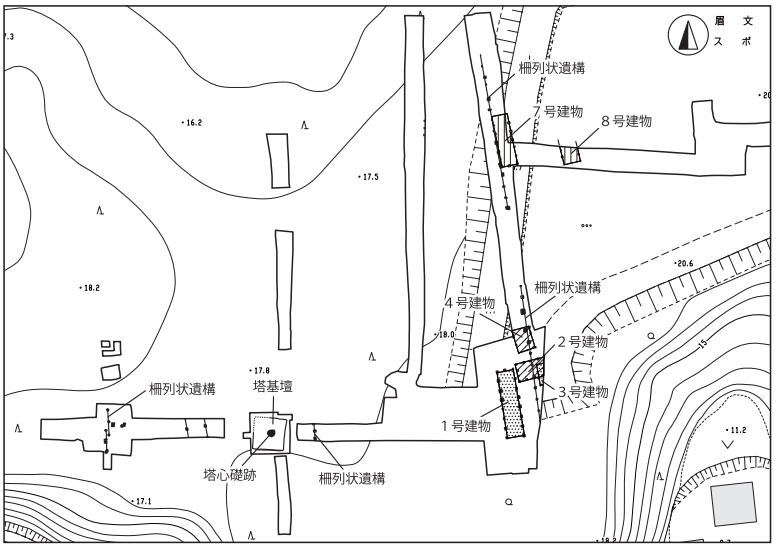
シャコデ台地の中央部に位置する古代白鳳寺院跡です。シャコデは『釈迦堂』の訛りであり、地元では寺院の存在が伝承されています。発掘調査では、古代寺院の存在を示す平瓦・丸瓦・瓦塔・鉄鉢形須恵器などが出土しています。伽藍配置の全容は不明ですが、塔跡の方形基壇遺構とその心柱の礎石の抜き取り穴が確認されています（図2-21）。この心礎石は、柳田町の善正寺に手水石として移転されており、現在も境内地に保存されています。心礎石の柱穴の観察とその形



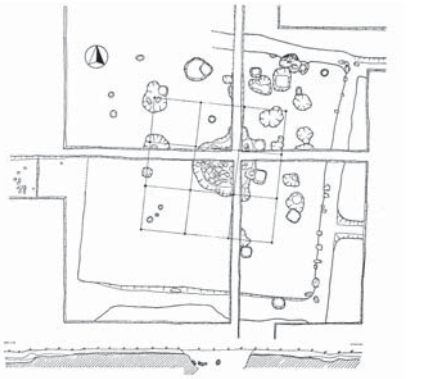
柳田シャコデ遺跡の変遷図

シャコデ廃寺塔心礎石（善正寺）





柳田シャコデ廃寺跡　トレンチ位置図および主要遺構位置図



塔跡基壇遺構

図2-21　柳田シャコデ遺跡・柳田シャコデ廃寺跡の検出遺構

式から、7世紀末から遅くとも8世紀初頭には創建されたと考えられています。

シャコデ廃寺の成立背景には、地方への仏教の浸透を受け、在地の首長級氏族の発願により氏寺として造営されたと考えられています。ただし、寺家遺跡では、8世紀前半には国家の関与を受けた祭祀専業的集落が成立していることから、シャコデ廃寺においても同様の影響を受け、創建時から官寺的性格を帯びていたとの指摘もあります。

出土する瓦資料は、眉丈山丘陵北部の柴垣松川瓦窯で生産されたもので、供給関係が確認されています。柳田シャコデ遺跡と寺家遺跡においても、この瓦窯の瓦資料が出土しています。8世紀後半に成立したとみられる気多神宮寺の可能性が指摘されており、9世紀初頭になると、塔基壇跡の東方に、方形柱穴による2×7間の掘立柱建物が整備されることから、この時期には官寺的性格が顕著となります。

寺家海岸遺跡、滝・柴垣海岸遺跡（8・9世紀）

寺家海岸遺跡は、寺家遺跡の西約500mに位置し、海岸砂丘の畑地に多量の製塩土器片が散布していることが確認されています。とくに、寺家遺跡でも出土している8世紀代の平底の製塩土器が多く含まれており、この時期から、盛んに塩づくりが行われていたと考えられます。

このほか、滝崎の沿岸部には、古代の製塩遺跡である滝・柴垣海岸遺跡群が展開しています。両遺跡とも、8世紀には製塩活動を開始したとみられ、生産された塩は、寺家遺跡での祭祀にも供給されたと考えられます。

気多社僧坊群跡遺跡（12～16世紀）

寺家町東部で発見された中世気多神社の社僧坊跡とみられる遺跡です。遺跡の東部にあたるブタイ地区では、中世の溝・道路遺構による方形区画遺構と掘立柱建物跡が、銅製経筒蓋・銅製六器・五輪塔・茶臼などの仏教関連遺物とともに発見されています。遺物の年代観から14世紀後半から16世紀を中心時期とする、中世気多神社に伴う寺院群の僧たちの生活空間（社僧坊）と考えられます。この一帯では、寺院に関する小字名が現在も多数残り、『気多神社文書』にみられる寺院名との対比が可能で、広い範囲で社僧坊が展開していたと推定されます（図2-24）。

また、チョウエイジ地区・シドノ地区では、近世（江戸時代）を中心とする遺構・遺物が確認されていることから、遺跡のなかでも西部にあたる寺家町寄りでは、年代観が近世へ移行すると考えられます。

一ノ宮遺跡（中世・近世）

気多神社の西部に広がる遺跡で、五輪塔や珠洲焼をはじめ中世の遺物が広範囲に確認されていますが、十分な調査が実施できておらず、遺構の詳細は不明で、遺跡の性格も明らかではありません。このなかでも、詳細な発掘調査が行われた気多神社隣接地の調査区では、近世陶磁器とともに井戸や柱穴遺構が検出されています。このことから、気多社僧坊群跡遺跡と同様に、遺跡のなかでも気多神社寄りの東部では、年代観が近世に移行することが確認されています。「ワカミヤ」の小字名が残るほか、近世の気多神社の大宮司家跡地の伝承もあり、気多神社と深く関わる遺跡と考えられます。

気多神社（けたじんじゃ）・気多神社社叢（けたじんじゃしゃそう）・夫婦石（めおといし）

気多神社は、能登国の一宮として知られ、眉丈山丘陵から南下する尾根に「入らずの杜（不入杜）」と呼ばれる禁足の社叢を背後に鎮座します。『延喜式神名帳』では、能登国で唯一の名神大社として記載される式内社で、北陸道の鎮守として越前敦賀の気比神宮とともに律令政府から重視されていたことが六国史を中心とする文献史料に確認されています。

境内は、南面する拝殿・本殿・神門を中心軸に、若宮神社、白山神社の摂社を左右に配し、参道が直線的に海岸まで続きます。これらの建造物は、中近世に武家の崇敬を受けて造営されたもので、能登国守護の畠山氏による永禄12年（1569）の再建銘をもつ摂社若宮神社が最も古い建造物となっています。このことから、遅くとも中世末期には、現在の境内建物と参道による主軸方位が成立していたことがわかります。摂社若宮神社以外の建造物は、近世初期に加賀藩主前田家の保護と寄進のもと、17～18世紀代に造営されたものです。

背後の社叢は、タブをはじめとする照葉樹林による希少な原生植生をよく残しており、国の天然記念物に指定されています。この内部には、石塁で囲まれた奥宮が鎮座するほか、中世の積石塚や土塁状遺構の存在も指摘されていますが、禁足地であるために、その詳細は明らかではありません。

古縁起によれば、祭神の大己貴命（オオナムチノミコト　別名：大国主命　オオクニヌシノミコト）は、出雲より三百余神を率いて海上から来臨したと伝えます。寺家町と柳田町の境界に位置する「夫婦石」とよばれる巨石には、オオクニヌシがこの巨石に立って邑知潟に生息したと伝

えるオロチ退治を行ったとの伝承があり、これが「蛇の目神事」として現在に伝えられています。このほかにも、能登地域を巡行する「平国祭」と呼ばれる巡幸祭や、国指定重要無形民俗文化財である「鵜祭」など、多様な特殊神事と地域の習俗が現在も残されています。

上記の近世気多神社の様子を示す古文書類として『気多神社文書』と『桜井家文書』があります。前者のなかで、「大宮司桜井家文書」とされる一群は、近世を中心とする社領・寺領などの記録や祭事の記録類が多く、先述の社僧坊群の寺坊・院坊の活動の詳細を把握するにあたり、重要な資料群となっています。後者は、加賀藩十村を務めた桜井家に残る古文書類で、近世末期の嘉永6年（1853）の気多神社および寺家町・一ノ宮町周辺の集落の様子を記録した絵図資料が含まれています。この絵図からは、気多神社の東側に「講堂・護摩堂・読経所・つりかね」の仏教関連施設と、その座主坊であった長福院をはじめとする社僧坊の位置を確認することができ、明治期の神仏分離以前の境内配置の様子を知ることができる重要資料となっています（図2-22）。

正覚院（しょうがくいん）

気多神社に西接する真言宗の寺院です。中世以来の気多社僧坊群の一寺で、前述の『気多神社文書』にも「正覚坊」の寺坊名を確認することができます。明治時代の神仏分離令により、多数存在した社僧坊は解体され、正覚院のみが残されます。その際に、気多神社および社僧坊の仏像・仏具・古文書類などの仏教関連資料が移され、所蔵されています。なかでも、平安後期の作とされる国指定重要文化財の阿弥陀如来坐像は、気多神社境内に置かれた講堂の本尊で、県指定文化財の銅板打出日輪懸仏は、気多神社本殿に置かれた御正体、同じく県指定文化財の銅板打出十一面観音懸仏は、摂社白山神社の御正体とされるものです。

これらの文化財群は、気多神社が中世以来の神仏習合の形態をとっていたことを示すとともに、その様子を復元することができる資料群として重要です。また、気多神社の古縁起類のなかでも正覚院所蔵本は、中世末期のものとされ、貴重資料となっています。

大穴持像石神社（おおなもちかたいしじんじゃ）・地震石（じしんいし）

気多神社の東に位置する式内社で、社殿を包む社叢がタブの杜となっており、折口信夫が、その『古代研究』で「漂着神（よりがみ）を祀ったタブの杜」と紹介した神社としても知られます。

祭神は気多神社と同じく、大己貴命（オオナムチノミコト）で、相殿の神に少彦名命（スクナヒコナノミコト）を祀ります。気多神社の摂社として畠山氏、前田家からの保護を受けましたが、現在は、地元の産土神として信仰され、祭神のオオナムチの呼称から「オナッサマ」とよばれています。

また、「大穴持神像石神社」とも記され、境内にはその「神像石（かみかたいし）」である「地震石」と呼ばれる霊石があります。地表に露出している部分はごく一部で、地下に拡がる巨石が地震を抑えていると伝承されています。これは、地震の鎮め石としての信仰で、地元では巨石・磐座（いわくら）信仰が現在も残されています。

大多毘神社（おおたびじんじゃ）

寺家町集落の東端部にあるタブの木に囲まれた社殿を持たない神社で、気多社僧坊群遺跡のシドノ地区にあたります。タブの老巨樹を神体とし、毎年大晦日の深夜に気多神社社叢の奥宮で行われる奥宮例祭に伴い、取り外された注連縄類をこの老巨樹の前で焼却する「火神事」と呼ばれる神事が行われます。「シドノ」は「火殿」の訛りで、火を使用する祭祀が現在も残される点が、寺家遺跡で発見された焼土遺構の祭祀行為と共通点があり、興味深い事例と言えます。

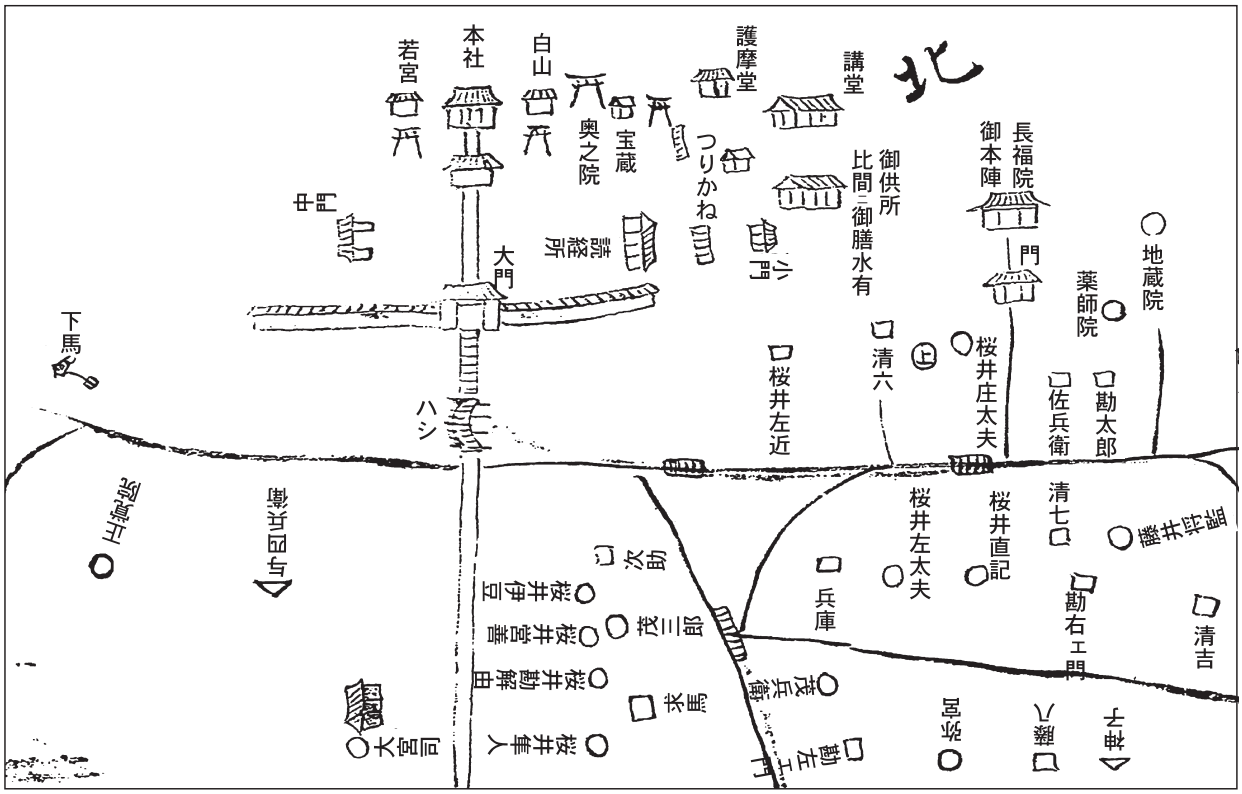


図2-22　桜井家文書「一ノ宮・同寺家村絵図」（部分抜粋）　※原資料を解読し、写植を記入・上書きして作成した。

気多神社と背後の社叢

正覚院　阿弥陀如来坐像

大穴持像石神社

地震石

その他 地域に残る小字名

小字（こあざ）には、古くからの村々や旧地形、耕作地などの通称が残されている場合があります。耕地整理などにより地形が大きく改変してしまったところでも、地域では変わらずその通称で呼ばれ、当時の様子を推定することが可能となる場合があります。

この地域では、先述したとおり、『気多神社文書』に確認できる気多社僧坊群跡の寺坊・院坊名が濃厚に残されています（図2-24）。また、眉丈山丘陵で近世以降に無数に作られた堤（ため池）には、その名に遺跡の存在を示唆するものも確認することができます。たとえば、寺家町の「大六冶（ダイロクジ）堤」は、社僧坊のひとつであった「大楽寺（ダイラクジ）」の転訛と考えられます。

また、柳田町の旧地籍図では、西山池（堤）の上流部に「カナクソ之部」と呼ばれる谷地の地籍が確認できます。「カナクソ」は、製鉄の際に生じる鉄滓を指す言葉で、この周囲に製鉄遺跡が存在する可能性を濃厚に示唆しています（図2-23）。

こうした地域に残る小字は、歴史地理学的な視点から、地域の歴史を検討するうえで、非常に重要な情報となります。

図2-23　西山池と小字「カナクソ之部」位置図（S＝1/10000）

図2-24
寺家遺跡・気多神社
周辺の旧地形と小字名

※国土地理院の空中写真（昭和27年・1952年米軍撮影）を使用。

第8節　地理的・歴史的環境からみた史跡と周辺遺跡群

以上に述べてきたように、史跡とその周辺には、縄文時代から遺跡の活動がみられ、現在に至るまで極めて長期間にわたる歴史的環境があります。その性格も特徴的で、信仰・宗教関連遺跡が広域かつ長期間にわたって集中して営まれています。以下には、史跡とこれらの遺跡群の関係性について地理的・歴史的視点から俯瞰し、この地域の歴史的価値の整理を行います。

（1）地理的環境からみた史跡と周辺遺跡群

寺家遺跡は、南北に縦走する海岸砂丘と東西に張り出す眉丈山丘陵が接する交点に位置し、天然の良港である旧邑知潟の水面にも近接していたと考えられます。こうした地形的な交差点にあたる場所は、交通の要所や他地域との境界となることから、重要遺跡が存在することが多く、祭祀遺跡などの特殊な遺跡が存在することも指摘されています。また、能登半島自体が、東北・北方地域や大陸への海上交通の要衝として重視されており、その入り口に位置する羽咋地域は、畿内・山陰・北九州などの西日本世界からの技術や文化をいち早く受け入れる地理的環境に恵まれていました。なかでも、半島部への入り口に位置する眉丈山丘陵先端部の滝崎は、日本海沿岸流に乗って航行する人々にとっての絶好の航海標識（目じるし）になっていたと考えられます。この滝崎には、日本海側屈指の規模を誇る帆立貝型古墳の滝大塚古墳が位置しており、直径約90mに復元される葺石を伴う大型人工構造物であることから、海上からの視認性を意識した古墳であることも指摘されています。航海者たちにとっては、滝大塚古墳を含む滝崎の自然地形は、安全な航海を導く重要な指標であり、これに対する信仰が生まれていたと考えられます。

史跡とその周辺には、前述したとおり、多様な遺跡群が展開し、周囲は信仰・宗教関連の重要遺跡が集中するエリアとなっています。古代祭祀遺跡である寺家遺跡もまた、こうした地理的環境のなかで成立した特殊な重要遺跡のひとつと言えます。

（2）歴史的環境からみた史跡と周辺遺跡群

寺家遺跡の前史

縄文時代には、寺家遺跡、気多社僧坊群跡遺跡、柳田シャコデ遺跡で土坑や落とし穴などの遺構が発見されています。この時期は、邑知潟から日本海へそそぐ河口部は、羽咋砂丘と眉丈山丘陵のあいだを流れていたと考えられており、河口に対岸する砂丘と丘陵地で、縄文人が活動していたことがわかります（図2-25）。

弥生時代になると、海退により砂丘が広がり、邑知平野の沖積化が進みます。邑知潟南岸には、吉崎・次場遺跡が成立し、能登でもいち早く稲作がはじまります。この遺跡は、内行花文鏡や銅鐸鋳型の可能性がある青銅器鋳型が出土しており、その規模と内容から、邑知潟の内水面を天然の良港とする拠点集落として、さまざまな技術や文化を受容したと考えられます。弥生時代後期には、生産基盤の向上を背景に、丘陵地で柳田うわの遺跡、砂丘地で寺家遺跡、柳田猫の目遺跡、寺家海岸遺跡、一ノ宮郵便局遺跡、的場農業倉庫前遺跡などが確認されており、遺跡の増加がみられます。邑知潟の河口部は砂丘の発達により埋没あるいは狭小化したと考えられ、現在の河口部へ南下する流路が形成されたとみられます（図2-26）。

古墳時代に入ると、市内では、古墳づくりが盛んとなり、滝崎では、日本海側屈指の大型帆立貝型古墳である滝大塚古墳（5世紀前半）を主墳とする滝古墳群が成立し、6世紀末に至るオーショージ支群まで、群集墳が築かれます（図2-27）。

眉丈山丘陵の内部では、6世紀前半の柳田山伏山古墳が造墓され、6世紀代にかけて柳田古墳群が成立します。この背後には、能登でいち早く須恵器生産を開始する柳田古窯跡群が位置しています。

砂丘地では、南側に流路を変えた羽咋川と長者川・子浦川が合流する付近で、羽咋古墳群が成立しています。

この時期の集落遺跡をみると、寺家遺跡の南端部で6世紀前葉の集落が成立し、銅鏡片・石製紡錘車・管玉・ガラス玉・手捏ねミニチュア土器などの出土から、集落内祭祀が行われていたと考えられます。釜屋遺跡でも、刀子や臼玉の出土があり、邑知潟に面する砂丘地裾部で、同様の集落が存在していたとみられます。また、柳田シャコデ遺跡では、柳田古窯跡群での須恵器生産に関わる7世紀前葉の竪穴建物集落が営まれます。この建物は、7世紀後葉になると、大型の掘立柱建物群に建て替えられます。この時期の掘立柱建物跡の検出事例としては非常に希少であり、周囲において優位性を持つ特別な集落だったと推定されます。

以上にみたように、砂丘地では集落遺跡がみられるのに対し、眉丈山丘陵地では、古墳が集中しており、この地域の墓域として認識されていたとみられます。その時期も、5世紀前半の滝大塚古墳から7世紀代の終末期古墳である寺家モスケ古墳にいたるまで、長期にわたって古墳づくりが行われています。以上から、地域の統治とともに古墳造墓のほか柳田古窯跡群での須恵器生産や柳田シャコデ遺跡での工人集落などを傘下に掌握する在地首長級氏族の存在が推定されます。この氏族は、滝大塚古墳以来の古墳造墓とその祖先崇拝の祭祀を継承するほか、地域の農耕や日本海における航海などを司る在地の神々への祭祀も担ったと考えられます。

この時期の能登半島は、大和王権から東北や北方世界に向けた拠点として重要視されており、羽咋地域では、地方官職である「羽咋国造」が置かれています。この国造一族は、『古事記』等にもその名がみられる、羽咋地域を本拠とした「羽咋君」と考えられており、上記の考古学的成果との関連が注目されます。

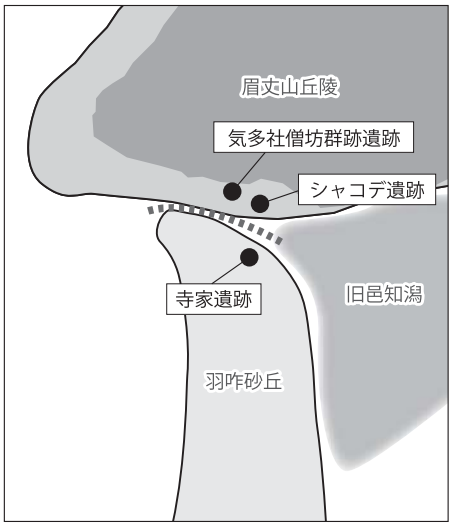


図2-25　縄文時代のおもな遺跡群

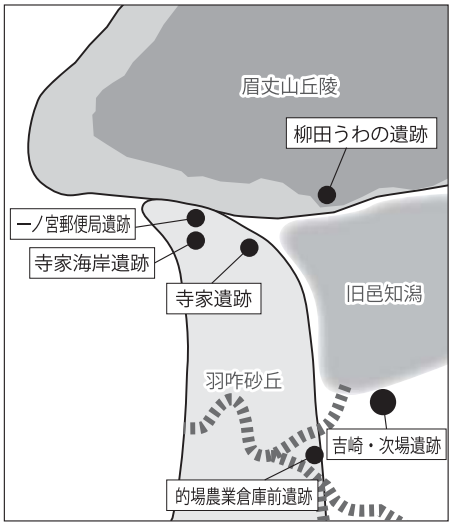


図2-26　弥生時代のおもな遺跡群

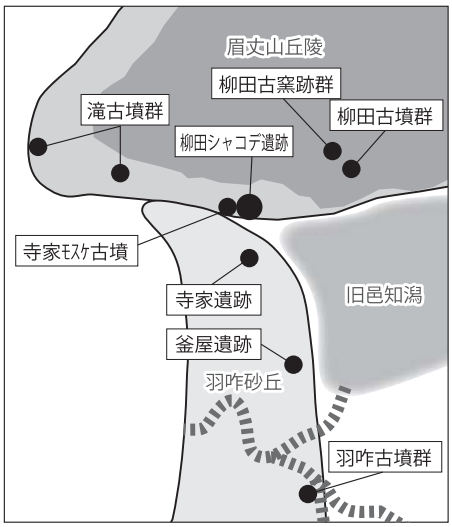


図2-27　古代時代のおもな遺跡群

寺家遺跡の最盛期

奈良時代（8世紀）に入ると、律令制による本格的な国家統治が始まり、718年には能登国が置かれます。羽咋を中心とする日本海側の外浦一帯には「羽咋郡」が置かれ、現在の志賀町から宝達志水町を中心とする細長い範囲が郡域となります。古代羽咋郡の郡役所である「郡衙（郡家）」は、遺跡としては確認されておらず、「羽咋郷」が存在したとみられる羽咋中心市街地および羽咋川河口部付近からその周囲にかけて存在したと推定されています。この河口部付近には、日本海と邑知潟をつなぎ、租税や物流の管理を担う公的施設である「郡津」も存在したと想定されます。河口部付近には、羽咋古墳群が位置し、現在も式内羽咋神社が鎮座する重要な立地環境にありますが、市街地化が進んでいるため、考古学的な成果が蓄積されておらず、今後の調査研究課題です。

寺家遺跡では、この時期に遺跡の活動が活発になり、8世紀前半の竪穴建物が規則的に配置された祭祀専従的集落と祭祀場が整備されます。この竪穴建物群からは、銅鏡などの祭祀遺物のほか、ガラス坩堝片やガラス容器片など、地方では非常に希少な遺物が多数出土しています。このことから、寺家遺跡での祭祀には国家が関与し、遺跡内で祭祀の道具を生産するほか、生産できないものは都などから持ち込まれたと推定されます。また、祭祀に使用する塩は、周囲に展開する滝・柴垣の沿岸部や寺家海岸遺跡の製塩遺跡で作られたと想定されます。このほかにも、眉丈山丘陵では、製鉄遺跡の存在も確実視されることから、遺跡の祭祀活動の活発化に伴い、生産・供給体制が整えられたと考えられます。こうした祭祀専業集落と周辺生産遺跡の動向は、8世紀前半代の「神戸（かんべ）」や「神封（しんぷ）」などと呼ばれる、古代神社に従属した封戸（ふこ）の諸活動の一端を物語る考古学的成果として注目されます。

奈良時代のなかばにあたる748年には、万葉歌人としても知られる大伴家持が「気太神宮」（気多神社）を参拝したことが『万葉集』に記載されています。これは741～757年にかけて、能登国が一時的に越中国に併合されていたためです。大伴家持は、越中国の国司として国内視察と国つ神への参拝のため能登国内を巡行しており、この時期には、古代気多神社が能登国において重要な位置を占めていたことがうかがい知れます。

8世紀後半になると、能登国は757年に越中国から分離して、再度、能登国として立国します。寺家遺跡では、これまでの竪穴建物群から掘立柱建物に建て替えられており、大きな変化があったことがわかります。祭祀場では、大型焼土遺構が確認されており、大規模な燃焼行為を伴う祭祀が行われています。本章第6節（4）でも述べたように、古代の能登国は、東北や北方世界との交流や大陸との境界領域に位置することから国家の政策上の拠点として重要視されており、寺家遺跡の祭祀の性格のひとつとして、8世紀前半から交流のあった渤海国の使節に関連する国家的祭祀であったことが指摘されています。

一方、対面する台地上に位置する柳田シャコデ廃寺跡では、7世紀の末から8世紀の初頭には、塔を配した寺院伽藍が整備されます。その成立契機には、白鳳期の地方寺院の普及を受けて、先述した在地首長級氏族が、仏教への帰依による地域の統治を進めるとともに、古墳造墓に代わる一族の霊廟としての寺院造営を行ったことが想定されます。ただし、寺家遺跡では、8世紀前半には国家の関与を受けた祭祀集落が形成されており、シャコデ廃寺においても、創建当初から寺家遺跡と同様に国家的な関与を受けて官寺的性格を帯びていた可能性もあり、今後の調査研究課題です。いずれにしても、奈良時代には、この地域に寺家遺跡の神祇信仰とシャコデ廃寺の仏教信仰が併存し、古代の初期神仏習合が成立していたと考えられます。

以上にみたように、寺家遺跡では、これまでの在地神への祭祀に加えて、国家の関与を受けた律令祭祀が行われるようになり、この地域の在地神の神格は、国家が奉祭する神としての国家神へ変化したと考えられます。さらに、祭祀の主体者も在地首長級氏族から国家へと変遷したとみられ、8世紀に入り顕現化する希少な祭祀遺物やガラス生産関係資料、帯金具の出土がこれを示唆しています。

この時期の寺家遺跡周辺では、神祇信仰とシャコデ廃寺での仏教信仰が併存し、在地の祭祀と国家の祭祀が重層する、能登国の重要性を象徴した宗教的場面が形成されていたと考えられます。

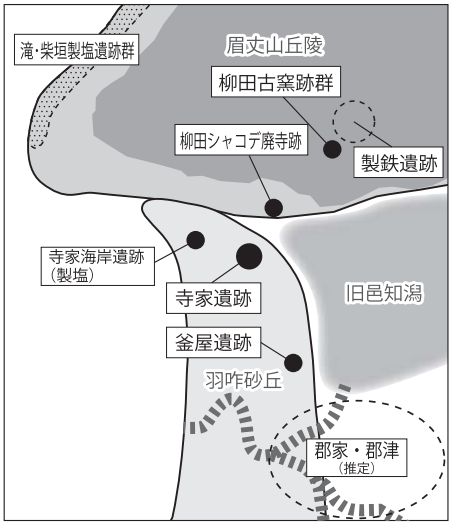


図2-28　奈良・平安時代のおもな遺跡群

平安時代（9世紀）に入ると、遺跡の範囲は最大の広がりとなり、大型の掘立柱建物群が立ち並んで、古代神社に関わる厨施設や祭祀の管理施設が置かれたことを示唆する「宮厨」「神」「宮」「司」「司舘」などの墨書土器が出土しています。また祭祀場では、9世紀後半の祭祀遺構が確認されており、石列状遺構により区画された内部に、大量の土器供膳具とともに銅鏡・直刀・勾玉などを奉献したとみられる祭祀が行われていたと考えられます。

文献史料をみると、古代の「官社」を記載した『延喜式神名帳』には、寺家遺跡周辺の式内社として、気多神社と大穴持像石神社の名がみられます。また、六国史においては、古代気多神社に対する奉幣や神階昇叙など、多数の厚遇措置の記述を確認することができ、9世紀後半には、そのピークを迎えています。こうした文献史料の記述は、上記の考古学的にみた寺家遺跡の構造変化の過程と時期的にも内容的にも整合性が高いことが注目されます。寺家遺跡の考古学的成果は、奈良時代以降に国家の祭祀を担った古代神社が、「官社」として整備される変遷過程を示唆するものと位置付けることができます。

寺家遺跡の転換期

平安時代の後期に入ると、律令制度による国家管理機能の低下とともに郡の機能も低下し、郡は「郷」「保」「院」などの行政単位と並列するようになります。1221年に作成された『能登国公田田数目録』には、羽咋郡内の記載に、羽咋郷の郷名を継承した「羽咋正院」がみられるほか、「湊保」の記載もみられ、その範囲として、羽咋川河口部から子浦川の下流域一帯が比定されています。この中世の記述から推定して、古代羽咋郡の郡衙や郡津が位置したと推定される羽咋川・子浦川下流域周辺は、国家の社会的変化を受けて変容しながら、平安後期から中世にかけて、院や保として存在したとみられます。

この時期の寺家遺跡では、9世紀末から10世紀初頭にかけて、自然環境の変化による大規模な砂丘移動の影響を受けたことが明らかになっており、遺跡の大部分が砂に埋没し、建物群の一部のほか、祭祀場や工房等の生産遺構群が機能しなくなったと考えられます。このほか、渤海国の滅亡による外交政策の変化もみられ、能登国の位置づけの変化も想定されます。

出土する祭祀遺物をみると、奈良・平安時代にみられた銅鏡などをはじめとする古代の金属製祭祀具がみられなくなります。このことは、以上に述べた社会的・自然的な変化を受けて、寺家遺跡においても、律令期の神祇祭祀とその在り方に影響を及ぼしたことを示唆しています。

中世（鎌倉・室町時代）になると、砂丘に覆われなかった範囲で、新たに土塁と溝により区画された建物群による方形の郭遺構が成立し、遺跡は中世的な様相へと変化していきます。この郭遺構は、古代以来の神社に関連した遺構とみられ、中世気多神社に関連する社家や神人の館跡の可能性があります。一方、眉丈山丘陵の段丘上では、気多社僧坊群遺跡の活動がみられるようになり、15世紀を中心とする社僧や寺人による社僧坊群の活動が確認されています。このことから、中世においても神社と仏教関連の遺跡が併存したと考えられ、中世の神仏習合が成立していたと推定されます。しかし、寺家遺跡のこうした遺構群も室町時代（14世紀）には廃絶し、最終的には、再び起こった大規模な砂丘移動（14世紀後半以降）により、遺跡のすべてが砂に覆われて埋没し、完全に廃絶します。中世気多神社の関連施設は、その廃絶により移転した可能性がありますが、考古学的には不明であり、今後の調査研究課題です。

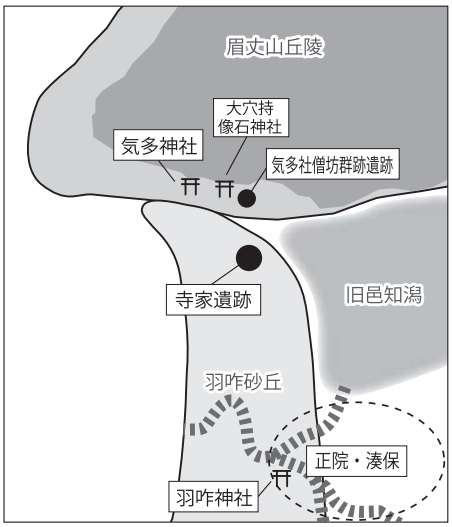


図2-29　中世のおもな遺跡群

寺家遺跡の廃絶後、砂丘地帯では遺跡がみられなくなり、遺跡の活動の中心は対面する段丘上に展開します。気多神社では、能登国守護の畠山氏により、16世紀の中ごろに境内で最も古い建造物である摂社若宮神社が再建されています。

寺家遺跡の後史

近世（江戸時代）に入ると、現在の寺家町集落と気多神社の周辺部で、遺跡が確認されています。一ノ宮遺跡の気多神社隣接地では、溝跡や柱穴等の遺構が近世陶磁器等とともに検出されており、大穴持像石神社隣接地の気多社僧坊群跡遺跡チョウエイジ地区、大多毘神社付近のシドノ地区でも、近世の遺構・遺物が確認されています。

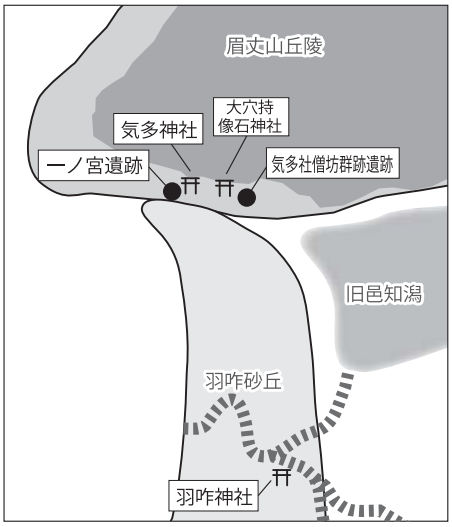


図2-30　近世のおもな遺跡群

加賀藩前田家は、気多神社に寄進を行い、拝殿をはじめとする現在の近世建造物の整備を行っています。近世気多神社は、『桜井家文書』の絵図史料にも確認されるように神仏習合の形態をとっており、境内地には、講堂や読経所などの仏教関連の施設が置かれていました。気多神社と社僧の様子については、『気多神社文書』によりさまざまな活動が詳細にわかっており、長福院・正覚院・薬師院・地蔵院・不動院・明王院の有力寺院は、神職と比肩する勢力を持っていました。この社僧坊群の名は、現在も寺家町東部一帯に小字として残されています。

これらの寺院は、明治時代の神仏分離令により解体され、正覚院のみが残されます。気多神社の講堂や読経所などに置かれた仏像や懸仏などの仏教関連資料は、正覚院に移され、現在に至っています。

以上にみてきたように、寺家遺跡は、古代気多神社に深く関わる遺跡として重要であり、その考古学的成果は、中世の廃絶に至るまで把握することができます。その後の近世においては、気

多神社関連の文献史料や有形・無形の文化財等の検証によって、現在に至る祭祀と信仰の変遷を知ることができます。寺家遺跡とその周辺関連遺跡と文化財群は、この地域が置かれた地理的・歴史的環境と社会的変化のなかで、祭祀や信仰が、どのように成立し展開したのかを、極めて長期間にわたって検証することができるという意味において非常に重要な価値をもっています。

参考文献

発掘調査報告書

【石川県】

石川県立埋蔵文化財センター 1982「能登海浜道関係埋蔵文化財発掘調査の経緯」『能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』

石川県立埋蔵文化財センター 1982『柳田タンワリ１号窯跡　西出川通常砂防工事（予防）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』

石川県立埋蔵文化財センター 1984『羽咋市柳田シャコデ遺跡　能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』

石川県立埋蔵文化財センター 1984『羽咋市　気多社僧坊跡群　能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』

石川県立埋蔵文化財センター 1986『寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ　能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』

石川県立埋蔵文化財センター 1988『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ　能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』

石川県立埋蔵文化財センター 1997『寺家遺跡　県営ほ場整備事業羽咋西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』

【羽咋市】

羽咋市教育委員会 1978『羽咋市寺家チョウエイジ遺跡　圃場整備事業に係る緊急発掘調査報告』

羽咋市教育委員会 1979『羽咋市一ノ宮遺跡Ａ地区　ほ場整備事業に係る調査の記録』

羽咋市教育委員会 1980『羽咋市一ノ宮遺跡Ｂ地区　一滝古墳群一』

羽咋市教育委員会 1982『釜屋・新保・猫ノ目遺跡　住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書』

羽咋市教育委員会 1983『寺家遺跡　住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書』

羽咋市教育委員会 1984『寺　家』

羽咋市教育委員会 1985「寺家シドノ地区（遺跡）発掘調査」『昭和 59 年度羽咋市埋蔵文化財発掘調査報告書』

羽咋市教育委員会 1987『柳田シャコデ廃寺跡』

羽咋市教育委員会 1989『釜屋遺跡』

羽咋市教育委員会 1989『寺家遺跡第８次調査報告書』

羽咋市教育委員会 1989『寺家遺跡第 10 次調査報告書』

羽咋市教育委員会 1992『眉丈台の遺跡群　眉丈台地自然緑地公園整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』

羽咋市教育委員会 1997『寺家遺跡第 12 次調査報告書 - 個人住宅建設に伴う発掘調査報告書 -』

羽咋市教育委員会 2000『寺家遺跡　一般国道 249 号交通安全施設整備（一種）工事に係る　第 13 次調査報告書 -』

羽咋市教育委員会 2006『寺家遺跡　第 14 次～第 18 次発掘調査報告書』

羽咋市教育委員会 2010『寺家遺跡　発掘調査報告書総括編』

【その他】

富山大学人文学部考古学研究室 1991『能登滝・柴垣製塩遺跡群 : 古代揚浜式塩田・鉄釜炉・土器製塩炉の調査』

その他（主要論考等）

羽咋市 1973『羽咋市史　原始・古代編』

羽咋市 1975『羽咋市史　中世・社寺編』

羽咋市教育委員会 1991『改訂　羽咋市の文化財』

羽咋市歴史民俗資料館 2006『羽咋市歴史民俗資料館特別展図録　古代能登の神々とまつり』

羽咋市教育委員会 2006『羽咋市ふるさと歴史シンポジウム　古代寺家遺跡のナゾをさぐる　当日資料集』

浅香年木 1979「古代の北陸道における韓神信仰」『日本海文化』第６号 雄山閣出版

浅香年木 1981「気多神社と寺家の祭祀」『古代を考える 29　羽咋市寺家遺跡の検討』古代を考える会

浅香年木 1988「XXX Ⅶ　古代の能登国気多神社とその縁起」『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター

浅香年木 1989「気多の神と「異国」の王子　能登一宮気多神社と寺家遺跡」『浅香年木遺稿集第二集　茜さす日本海文化　北陸古代ロマンの再構築』石川史書刊行会

藤則雄 1971「北陸の海岸砂丘の埋積腐植土層の編年とその生成環境」『第四紀研究』10，134-146

藤 則雄・小嶋芳孝 1989「寺家遺跡における平安時代中期の砂丘形成とその意義 " 平安海進 " の発見と新提唱」『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会

藤 則雄 2006「寺家遺跡の砂丘環境の概要」『寺家遺跡 －第 14 次～第 18 次発掘調査報告書－』羽咋市教育委員会

谷内尾晋司 1991「対渤海交渉と福良港」『客人の湊　福良の歴史』福良の歴史編さん委員会

宇野隆夫 1991『律令社会の考古学的研究　北陸を舞台として』桂書房

北陸古代瓦研究会 1987『北陸の古代寺院　その源流と古瓦』桂書房

石川考古学研究会　1997『石川県考古資料調査・集成事業報告書［祭祀具Ⅱ］』

小嶋芳孝 2006「境界と官道の祭祀－古代能登における検討事例－」『古代の信仰と社会』六一書房

小嶋芳孝 2008「古代日本の境界領域と能登」『古代日本の異文化交流』勉誠出版

吉岡康暢 2009「末松廃寺をめぐる問題」『史跡　末松廃寺』文化庁

吉岡康暢 2013「横江荘遺跡をめぐる諸問題」『加賀 横江荘遺跡』白山市